

(第 12 号様式)

## 学位論文の要約 (研究成果のまとめ)

氏名 堀内 史枝

学位論文名 自閉性スペクトラム障害における感情および行動上の問題  
：学齢・性別毎の定型発達児との比較

---

### 学位論文の要約

#### はじめに

発達障害(Developmental disorder)とは、先天的な様々な要因により、乳児期から幼児期にかけて特性が現れる発達遅延の総称で、自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder: ASD)、注意欠如・多動性障害、学習障害などが含まれる。新しいアメリカ精神医学会の診断基準(DSM-5)では、ASDは社会性の障害と常同性により診断され、小児自閉症やアスペルガー障害などがすべて含まれることとなった。発達障害的要素は、多かれ少なかれ誰でも有しているが、同等の発達障害的要素を有していても、二次障害の程度により、社会生活面の支援が必要な場合もあれば、支援を必要としない場合もある。ASDにおいては、発達障害に併存する二次障害を早期に捉えて的確に介入することが重要である。

#### 目的、対象および方法

今回、私はDSM-IV-TRに基づいてASDと診断された児童思春期例(4-16歳)の二次障害を年齢および性別毎に明らかにすることを目的とし、強さと困難さ質問票(Strengths and Difficulties: SDQ)を用いて、ASD例173名と、性年齢を一致させた定型発達例173名を比較検討した。SDQは、精神症状と問題行動に関して、幼児期から青年期までを共通した25項目で回答する自己記入式質問票である。多側面の行動上の問題(情緒の問題、行為の問題、多動/注意の問題、仲間関係の問題)を簡便に測定し、評価することができる。行動上の問題および総スコアは高値であるほど問題が多いことを示し、加えて行う社会性スコアは高値であるほど社会性があることを示す。

#### 結果

ASD群では、SDQ総スコア、行為問題、多動/注意の問題において、女性例が男性例に比し有意

に高値であった。一方、定型発達群は、SDQ 総スコアおよび多動/注意の問題において男性例が女性例に比し有意に高値であり、対照的な結果であった。

次に、年齢・性別毎の ASD 群の二次障害を明らかにすることを目的に、4-6 歳、7-9 歳、10-12 歳、13-16 歳の 4 群で性別ごとに、ASD 群と定型発達群とで比較を行った。その結果、1) **SDQ 総スコア**は、いずれの年齢群および性別においても、ASD 群が定型発達群に比し有意に高値であった。ASD 群では男女ともに年齢の上昇とともに有意に増加したが、定型発達群では増加しなかった。2) **情緒の問題**は、男性例では ASD 群、定型発達群ともに 10-12 歳群が最も高値で 13-16 歳群では低下した。ASD 群は定型発達群と比し有意に高値であり、その差異は 13-16 歳群で最も大きかった。女性例でも 10-12 歳の ASD 群が最も高値で、定型発達群との差異は 10-12 歳群で最も大きかったが、定型発達群の女性例は 13-16 歳群で急激に情緒の問題が増加し、ASD 群と同レベルに達した。3) **行為の問題**は、男性例では両群において有意差は認めなかったが、女性例では ASD 群において成長とともに有意に増加し、定型発達群との差異は 10-12 歳で最も大きかった。4) **多動/注意の問題**は、ASD 群では 4-6 歳群レベルから下がらなかったが、定型発達群では、男女ともに年齢が上がるにつれ有意に低下した。5) **仲間関係の問題**は、男女ともに、ASD 群では年齢の上昇とともに問題が増加し、定型発達群との差異が大きくなった。6) **社会性**は、男性例は 4-6 歳群と 7-9 歳群、女性例は 4-6 歳群において、ASD 群と定型発達群との差が顕著であったが、10 歳以降になると 2 群間に有意差はなかった。

## 考察

4-16 歳の ASD 群と定型発達群で比較したところ男女差を認めた。それぞれについて検討すると、情緒の問題は、ASD 群では小学校高学年頃に最も出現する可能性が高かった。ASD 例は他人のみならず自己の感情の読み取りも困難であり、自分の感情を自己認識できていない可能性があるため配慮が必要である。行為の問題は、特に ASD 女性例では小学校高学年頃に顕著となる可能性が高いため、問題の発生をあらかじめ想定する必要がある。多動/注意の問題は、ASD 例では男女問わず、中学生頃に顕在化する可能性があり、多動/不注意症状から更に二次障害が起きないように配慮が必要である。仲間関係の問題は、ASD 群では年齢問わず高値であるが、ASD の二次障害というよりは ASD の中核症状を反映している可能性が高い。社会性は、ASD 男性例は小学校高学年頃より、ASD 女性例は小学校低学年頃より、定型発達児と同等に社会的行動を獲得できる可能性が示唆された。

以上より、SDQ は、ASD の二次障害を明らかにする上で有用であり、年齢毎・性別毎の ASD の感情および行動上の問題を明らかにすることは、発達障害の二次障害の予防の観点からも重要であることが示された。

主論文 : Horiuchi F, Oka Y, Uno H, Kawabe K, Okada F, Saito I, Tanigawa T, Ueno S:  
Age- and gender- related emotional and behavioral problems in children with  
autism spectrum disorders: comparison with control children. Psychiatry  
Clinical Neuroscience 2014 Jan 22. DOI: 10.1111/pcn.12164.